



Title	道北地域における自然系野外博物館とその活用(予報)
Author(s)	鈴木, 明彦; 向井, 正幸
Citation	僻地教育研究, 52: 137-141
Issue Date	1998-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/1604
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである

道北地域における自然系野外博物館とその活用（予報）

鈴木 明彦（北海道教育大学岩見沢校）

向井 正幸（旭川市博物館）

Preliminary study on Field Museums in northern Hokkaido and their application

Akihiko SUZUKI and Masayuki MUKAI

1. はじめに

博物館及び相当施設は、展示資料の形態に基づいて、建物博物館と野外博物館に大別される（新井，1956）。このうち、野外博物館は、「屋根」のない開かれた自由な博物館として、地域の活性化あるいは生涯学習事業との関連から、近年多くの人々の関心を集めるようになった（新井，1989，1995）。特に現地保存型の自然系野外博物館（フィールドミュージアム）は、現在の環境と過去の環境（=古環境）を比較しながら学ぶことのできる“生きた博物館”として注目されている（新井ほか，1986）。

そこで、道北地域（北部北海道）の自然系野外博物館（フィールドミュージアム）を対象にして、地域の貴重

な野外自然資料を、博物館教育や生涯学習の観点から再活用することを検討した。小論では、近年筆者たちが地質学・古生物学のフィールドとしている道北地域の中から、旭川市、中頓別町及び浜頓別町の野外博物館（図1）を選定し、その活用例を予察的に紹介する。

2. 自然系野外博物館

日本においては、野外博物館は木場一夫によって1949年にはじめて定義された（新井，1989）。木場は、特にアメリカの国立公園にある路傍博物館（Trailside Museum）と戸外博物館（Open-air Museum）に注目し、それらをまとめて野外博物館とよぶべきだと提唱した。また、野外博物館とは、自然および考古・歴史的遺跡そのものが野外における展示として説明可能であることを強調した。

自然系野外博物館（フィールドミュージアム）に関しては、特に地学分野からの素材を検討した新井重三による一連の研究がある（新井，1956など）。彼は18年間にわたり秩父自然科学博物館（埼玉県）に勤務する中で、自然観察路を逐次整備し、博物館自体を路傍博物館として位置づけ、現地保存型の自然系野外博物館として完成させた（新井，1989）。

新井（1989）によると、自然系野外博物館は、自然を構成する地質（岩石・化石等）・地形・動植物などを野外で展示・公開するものと定義されている。また、自然系野外博物館（Field Museum）は、総合野外博物館（General Field Museum）、野生生物保護センター（Wild Life Refuge Center）および天然記念物博物館（Natural Monument Museum）に細分される（新井，1989）。

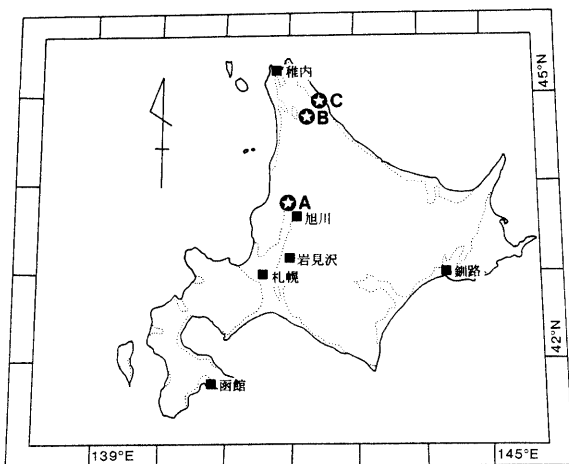


図1 道北の自然系野外博物館

- A. 嵐山自然公園（旭川市）
- B. 中頓別鍾乳洞（中頓別町）
- C. ウソタンナイ砂金採掘公園（浜頓別町）

上述の区分に従えば、総合野外博物館には国立公園、路傍博物館、自然観察路等が、野生生物保護センターには野生生物サンクチュアリー、バードサンクチュアリー、森林保護センター、海中自然公園等が、天然記念物博物館には、化石の森ビジターセンター、恐竜公園ビジターセンター、鍾乳洞博物館等が、それぞれ含まれることになる。たとえば、糸魚川（1993）では野外学習地（瑞浪市化石博物館）が、また千地（1994）では白山自然保護センターが、それぞれ自然系野外博物館の事例として紹介されている。

自然に恵まれた北海道には、貴重な自然資料（動物・植物・地形・地質・鉱物・化石等）を反映して、特徴ある自然系野外博物館が多数存在する（鈴木、1996；鈴木、1997）。

3. 道北の自然系野外博物館

(1) 旭川市：嵐山自然公園

旭川市は北海道のほぼ中央に位置し、北部北海道の政治・経済・文化の中心都市であり、交通の要衝としても

発展している街である。人口は36万人以上で北海道第2位の都市でもある。そのような都市において市内中心部から乗用車で約20分程度で行くことができる場所に嵐山地域（図2）が存在する。

この旭川市郊外にある嵐山地域は約680ヘクタールの面積を持ち、その70%が天然林であり動物・植物・地質等にも大変恵まれた自然の宝庫である（旭川市自然保護調査委員、1982）。また、嵐山地域には、1972（昭和47）年9月に先住民族であるアイヌの人々の文化の保存と伝承の場、そして市民のアイヌ文化の理解の場として「アイヌ文化の森 伝承のコタン」（旭川市博物館分館）が設置された他に、嵐山の西隣にある近文山には、1885（明治18）年8月27日に岩村通俊が上川調査のためにやって来て近文山に登り上川盆地を視察したことを記念して建てられた上川地方最古の碑である「近文山国見の碑」（旭川市指定文化財）がある（旭川市教育委員会、1989）。このように文化的・歴史的にも見ても嵐山地域は重要な位置を占める場所であり、自然・人文総合野外博物館としての性格を十分に兼ね揃えている場所である。

一般に、嵐山地域と呼ばれる所は図2のようにかなり広範囲にわたるが、今回の視点からすれば、概ね嵐山・近文山・下半面山などからなる丘陵地帯（以下「嵐山周辺」（図3）という）が適当と思われる。この嵐山周辺には遊歩道が整備され、誰でも自由に散策可能となっている。特に北邦野草園（図4-A）の入口付近から嵐山公園を通り展望台までの標高差約130m、時間にして最短時間約40分程度のコースは多くの人々が訪れ自然観

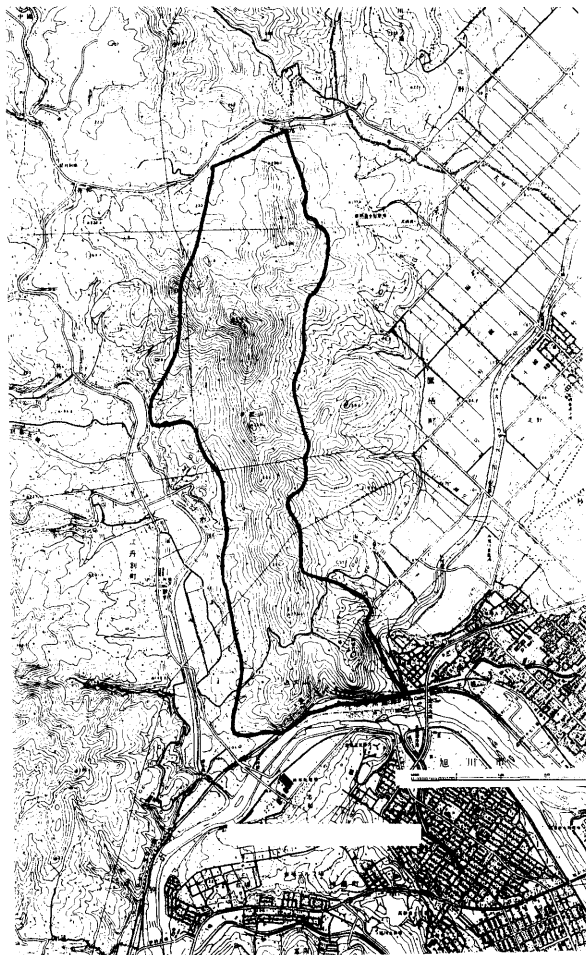


図2 嵐山自然公園の広域図

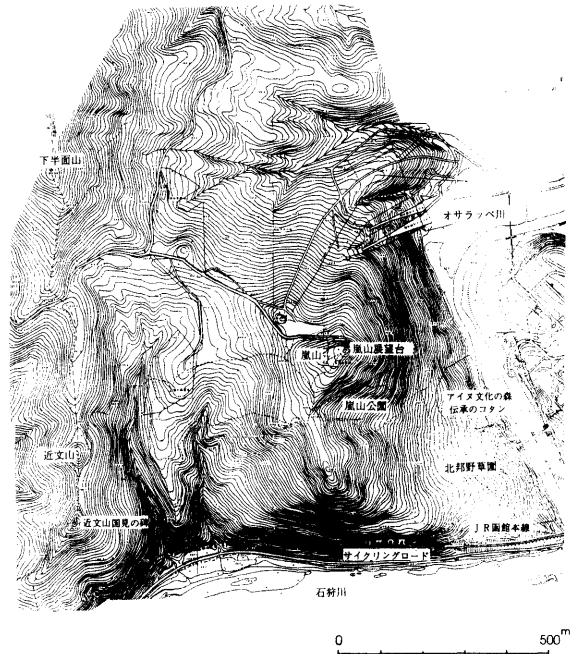


図3 嵐山周辺地域



図4 A. 北邦野草園
B. 嵐山自然観察会

察をするのには最適のコースとなっており、冬期間を除いて人々の憩いの場にもなっている。また、嵐山周辺は嵐山ビジターセンターや旭川市博物館によって行われる自然観察会(図4-B)の絶好のフィールドとなっており、四季を問わず行事が行われ、嵐山周辺の自然を多くの市民に紹介している。

この嵐山地域の自然資料として、次のようなものが知られている。鳥類では、コノハズク・ヨタカ・オオアカゲラ・トラツグミ・メジロなど23科62種が報告され、哺乳類・両生類等の動物では、エゾアカネズミ・シマリス・エゾリス・エゾノウサギ・キタキツネ・モモンガ・エゾサンショウウオなど18目112科631種が知られている。植物では、日本の森林土壌の一般的なPH値である4.5~5.5に入る嵐山付近の土壤には、ヒロハノサイハイラン・ウスゲアオミズ・ウスベニカラフトイバラなどの標準標本産地として知られる植物の他に、近文山付近の尾根に露出する蛇紋岩のような超塩基性岩を母岩としたPH値が8を超える土壤に生えるホソバコウゾリナ・エゾノヒモカズラ・ヤマトキホコリ・イワウサギシダなどの植生も知られ、岩相の変化に合わせ植生の変化が明瞭に観察でき、450種以上が知られている。その岩相であるが、嵐山周辺は地質学的には北海道を南北に縦断する

神居古潭構造帯の上川付近における最も東端に位置する。嵐山から近文山までの岩相は、東から西へ向かってチャート~緑色片岩~蛇紋岩へと明瞭に変化していく。嵐山の南側を東西に通るサイクリングロード（JR函館本線の跡地利用）を歩いていくと、その岩相の変化の様子をよく観察できる。以上のように、嵐山周辺を含めた嵐山地域は自然資料としては申し分ない場所である。

(2) 中頓別町：中頓別鍾乳洞

中頓別町は、北部北海道宗谷管内中部に位置し、林業と農業の町である。現在では過疎化が進み、現在町の人口は5,000人ほどである。

中頓別鍾乳洞は中頓別市街北東約4kmの釜無川支流流域の緩やかな丘陵地（標高100~150m）に点在する（図5）。本鍾乳洞は新第三紀の二枚貝やフジツボからなる石灰岩中に形成された洞窟系である。この洞窟系については1965年に愛媛大学学術探検部によって調査が行われ、その形態、洞内生植物、洞内生物についての概要が明らかになった。現在、確認されている洞口は、第一洞、第三洞および第四洞で、このうち第一洞が公開されている（田近, 1989）。

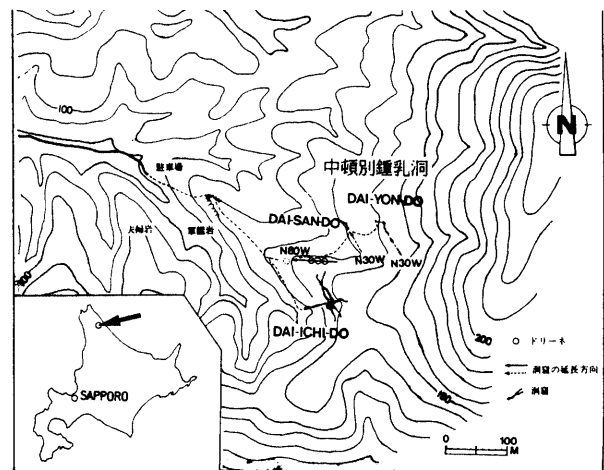


図5 中頓別鍾乳洞の位置（田近, 1989）

第一洞は、土壌および笹等の植生に被覆された小規模なカルスト地形（半カルスト?）を呈しており、小規模なドリーネがいくつか発達している。釜無川の支流によって開析されたとみられる露岩である軍艦岩（図6-A）や夫婦岩には溶食による縞模様が見られる。

洞口が確かめられているのは、第一洞、第三洞および第四洞の3洞である（現在、第二洞は洞口不明）。第一洞は本洞窟系で最大のもので、洞内は大局的に三階建て構造を示し、主洞が延長60m、支洞が約110mで、未調査の部分を含めると全長は数100mに達するものと推定される。第一洞は鍾乳石の形成は少ないが、多くの溶食



図6 A. 軍艦岩（鍾乳洞北西の溶食地形）
B. 鍾乳洞産貝化石（ナカトンベツホタテガイ）

地形を残している。第三洞は全長約65mで多くの鐘乳石が認められている。第四洞は延長約15mで、天井には多くの鐘乳石（破壊が進んでいる）が認められる。また、洞穴内にはコウモリが棲息し、洞穴性昆虫、チビシテムシも生息している。これらの洞窟は陥没や土砂の流入によって相互に分断されているものの、本来は一つの洞窟系として形成されたものとみられる（田近，1989）。

これらの洞窟は新第三紀の中頓別層の貝殻石灰岩中に形成されている。この貝殻石灰岩中には二枚貝のなかでもホタテガイ化石（ナカトンベツホタテガイ）が多量に含まれる（図6-B）。この石灰岩は厚さ15～40mで大規模なものではないが、この丘陵地の広い範囲に分布が認められる（田近，1989）。なお、この貝殻石灰岩の地質年代は従来鮮新世とされてきたが、現在では中期～後期中新世と考えられている（浅田，1993）。

(3) 浜頓別町：ウソタンナイ砂金採掘公園

浜頓別町は、北部北海道宗谷管内に位置する漁業と農業の町である。現在町の人口は8,000人ほどである。白鳥が訪れるクッチャロ湖があることでも知られている。

ウソタンナイ砂金採掘公園は、浜頓別市街から車で15分ほどの道のりのウソタンナイ川下流にある。ウソ

タンナイ川下流での砂金発見90周年を記念して、この公園が作られた。1896（明治29）年、枝幸郡に一大砂金地帯が発見され、ゴールドラッシュとなった。この年から1899年にかけて錬漁場は、突然の不漁に見舞われ、漁民たちは4月から11月まで砂金掘りの出稼ぎをし、これまでの漁よりも収入を上げた。浜頓別町の宇曾丹と中頓別町の兵安にかけて、1899（明治32）年には、山のなかは常に3,000人も採取者がひしめきあうという、最盛期を迎えた。

産金量は記録に残っているだけでも年間750kgを超えていた。1900年にはウソタンナイ川の支流で、縦10.6cm、横6.3cm、厚さ2.5cm、765gの多少凸凹した4ミリ型の砂金が発見された。現在写真が残っている日本最大のもので、1903年、大阪の勤業博覧会に展示され、当時の帝室博物館に模型があるという記録があるが、実物も模型も、現存するかどうかは不明である。

ウソタンナイ砂金採掘公園内にはレストハウスを兼ねたゴールドハウスがある（図7-A）。また、公園内の川幅は10メートルぐらいで、水深わずか10～20センチ足らずの小川では実際に砂金取りが体験できる（図7-B）。ゴールドハウスから貸してもらった股下まであるゴム長靴を履き、カッチャと呼ばれる鍬とユリ板を持って川へ入り、以下の要領で砂金を探す。まず川上を向いて、片

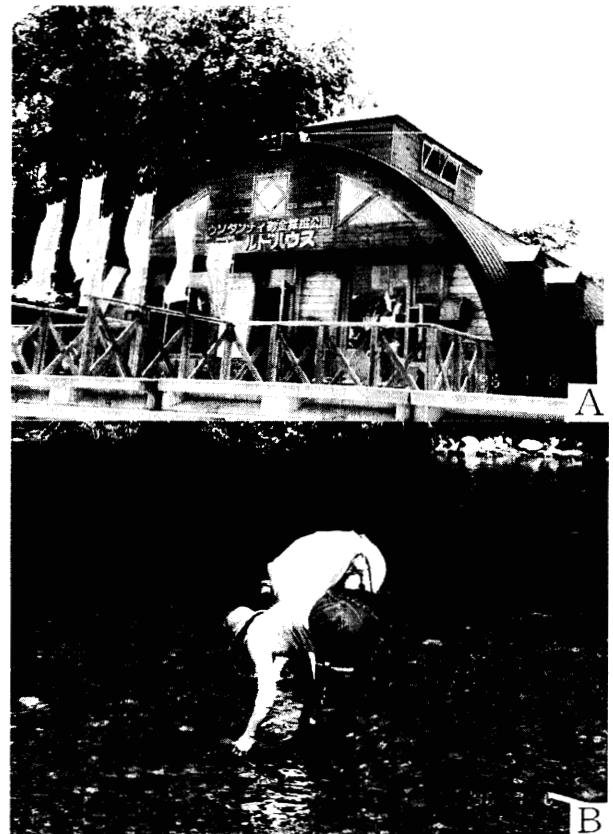


図7 A. 砂金採掘公園内のゴールドハウス
B. 小川での砂金採り体験

足で踏んで沈めたユリ板の上にカッチャで川底の泥や砂を掘り起こしながらのせていく。次に、大きな石は捨て、今度は川下へ向きを変えて、ユリ板を水中に入れた状態で中腰になりながら両手で前後左右に揺する。そうすると泥や砂が流れ落ち、比重の重い砂鉄や砂金だけが流れずにユリ板上に残るのである。

4. 終わりに

以上、道北の各地域における自然系野外博物館（フィールドミュージアム）の活用例を紹介してきたが、さらに今後の発展や改革が望まれるところである。

ここでは、第3章で述べた嵐山自然公園について、やや詳しく検討してみる。この場所を生涯学習や博物館教育の視点から見たら以下のことが言える。通常、野外博物館といえば観察ルートの概略を示したルート・マップの看板の他に、樹木の名称などが示されたプレート数を多く見受けられるであろう。ところが、この嵐山周辺においては樹木の説明プレートが散策路沿いにある程度で、花などの植物や岩石などの説明プレートはほとんど見られない。これは、この地域がごく最近まで営林署の管轄であったことに由来するものであるが、この樹木の説明だけに片寄った不親切とも思えるプレートの少なさが、逆に訪れた人に対し積極的に図鑑を見させる動機にもつながっているところが実に良く、自然観察に訪れた人達は立ち止まりながらじっくりと観察をしていく姿が遊歩道ではよく見られる光景になっている（もっとも北邦野草園（有料）の園内では説明プレートが親切に付けられており、初心者にとっては大変ありがたい場所でもある）。

これらのことが、個々人の生涯学習へのきっかけや意欲にもつながり、また博物館教育を行っていく上でも豊富な自然観察の題材を与えてもらうことにつながった。その代表的な例として、平成6年度に旭川市博物館が主催して実施した動物・植物・地質に関する市民合同の嵐山総合調査には、毎月20数名が集まり各班に分かれてそれぞれ自主的に調査を行い、その成果を年度末に企画展としてつくり上げることができた。これは市民による博物館の受動的な利用から能動的な利用に成功したことを意味しており、嵐山周辺はそれに大いに貢献したと言える。

この野外博物館としても重要な位置を占める嵐山周辺であるが、この遊歩道の一つの終点でもある嵐山頂上近くの展望台から眺める景色は、旭川市を含めた上川盆地を一望でき、遠く大雪山系や十勝岳連峰の山並みを見ることができる。ここから眺める夜景も大変素晴らしく、乗用車でやってくる人も少なくはなく、嵐山周辺は旭川の

観光名所としても知られている。しかし従来から嵐山周辺の自然保護を大変重視する立場をとっているため嵐山展望台へ通じる道路は、狭い砂利道のままにし現在に至っている。

また、1996年度から北邦野草園を含めた嵐山周辺一帯を、旭川市が3年計画で国から買い取っており、その管理形態・利用方法が多方面から再び盛んに議論され始めてきている。人の手があまり入っていないのが嵐山周辺の良さであり、また財産でもあるため、今後とも豊かな自然をそのまま残していくことに力を入れ、現地の整備は今まで通り最小限に止めるべきであろう。これは現地保存型の立場を取る野外博物館としてもあるがままの姿をそのまま残していくという意味で重要なことと言え、今後嵐山周辺を生涯学習や博物館教育の場として活用していく上においても大切なことであろう。

最後に小論をまとめるにあたり、貴重な資料を提供して下さった旭川市博物館ならびに旭川市教育委員会の方々々に厚く御礼申し上げる。

参考文献

- 浅田英嗣（1993）北海道北部中頓別層産軟体動物化石の研究。北海道大学理学部卒業論文（手記）。
- 旭川市自然保護調査委員（1982）旭川市自然保護調査報告第5号－神居古潭・嵐山地域－。
- 旭川市教育委員会（1989）あさひかわの文化財。
- 新井重三（1956）第8章 野外博物館。博物館学入門、理想社。
- 新井重三ほか4名（1986）博物館と環境教育。博物館学雑誌第11巻第2号。
- 新井重三（1989）野外博物館総論。博物館学雑誌第14巻第1・2号。
- 新井重三（1995）実践エコミュージアム入門。牧野出版。
- 千地万造（1994）博物館の楽しみ方。講談社現代新書。
- 糸魚川淳二（1993）日本の自然史博物館。東京大学出版会。
- 鈴木明彦（1996）北海道における野外博物館－特にフィールドミュージアムについて。年報いわみざわ第17号。
- 鈴木明彦（1997）過疎地域における博物館教育－自然系野外博物館の活用例－僻地教育研究第51号。
- 田近 淳（1989）中頓別鐘乳洞－第一洞の洞内形態－。地下資源調査所報告第61号。